

日本爬虫両棲類学会第 57 回大会で研究発表

佐藤孝則

2018 年 11 月 24、25 日の両日、麻布大学で日本爬虫両棲類学会第 57 回大会が開催され、二つのポスター発表をおこなった。演題は「奈良市内の山麓に生息するシュレーゲルアオガエルとモリアオガエルの混棲場所」、および「北海道上土幌町で確認されたキタサンショウウオの生息状況（概報）」で、前者は単著、後者は共著の発表だった。以下に、それぞれの発表概要を記す。

前者の発表では、『奈良県版レッドデータブック 改訂版』（2016）で「絶滅危惧種」に指定されたモリアオガエルと、「希少種」に指定されたシュレーゲルアオガエルの近縁な 2 種の保護・保全を図ることを目的に、両種の混棲状況の調査結果を報告した。この報告は、両生爬虫類の当該調査地における分布状況という概報（2015 年に同学会で発表）を前提に、個別具体種の詳報として発表した。また、これまで、モリアオガエルの自然分布地は春日山原始林周辺と室生寺周辺の 2 カ所だとされてきたが、当該調査地が 3 カ所目にあたることを、今回の発表で初めて明らかにした。ただ、生息個体数は、シュレーゲルアオガエルに比べると極端に少ない状況であることも報告した。

一方、後者の発表では、環境省が『レッドデータブック 2014』で「準絶滅危惧」に指定したキタサンショウウオが、既知の分布地である釧路湿原とは遠く離れた十勝管内上土幌町で自然分布していることを、正式に報告した。これは、2017 年に論文発表された予報（『爬虫両棲類学会報』第 2017 巻第 2 号）に基づく、生息状況の第 1 報である。発表者は、2018 年春の繁殖状況調査に関わった 6 名で、所属は全員とも異なり、私以外の 5 名は北海道に在住する研究者である。今回の発表では、上土幌町の個体群の特徴を明らかにし、釧路湿原の個体群との生態学的な比較に重点をおいた。とくに成体の外部形態や卵囊の形状、卵の受精率、天敵の有無などに焦点をあてて報告した。

なお遺伝的多様性については、現在、京都大学、琉球大学、国立科学博物館などによる研究チームが、両個体群間における mtDNA のチトクローム *b* 領域に基づくハプロタイプ状況について、またマイクロサテライト解析による遺伝集団間における特徴について、さらに MIG-seq 法による遺伝的相互関係について、それぞれ解析と検討を進めているが、今大会では報告されることはなかった。

教団付置研究所懇話会第 17 回年次大会に出席

金子 昭

11 月 29 日、亀岡市の大本本部みろく会館で開催された標記大会に出席した。教団付置研究所懇話会は、国内の宗教教団の付置研究所が互いの宗教について理解を深め、共通の課題について情報交換と相互研鑽を図るため、2002 年に発足した。現在、27 の研究所・団体が参加している。天理大学おやさと研究所は、大学付置研究所なのでオブザーバー参加ではあるが、第 1 回大会より積極的に同懇話会の活動に関わってきた。今回の大会には、私のほか、元おやさと研究所研究員で天理大学名誉教授である神田秀雄氏が個人の資格で出席した。

今回の大会テーマは、「なぜ、葬儀は必要なのか？ — 葬送儀礼の意味と宗教者の役割 —」。趣旨は、昨今の家族葬や直葬の増加、また葬送儀礼の脱宗教化の傾向に対し、宗教者がいかに説得力を持って人々に葬送儀礼の意味を伝えることができるかを狙いとした内容のものである。このテーマ設定のせいもあって関心は高く、各教団から 110 名もの出席者があり、盛況な年次大会となった。

発表の部では、各宗教から 4 本の発表が行われた。最初にキリスト教から、NCC 宗教研究所所属で関西学院大学神学部の中道基夫教授が「死者儀礼の再構築—キリスト教は日本の葬送文化から何を学んだか」について発題。その後、昼食をはさんで、参加者は大本本部神苑を見学、また「ギャラリーおもと」にて歴代教主の書画や焼き物を鑑賞した。

このあと 2 番目の発表として、新宗教から、『真如苑の葬儀』時代への対応の一例として」と題し、宗教情報センター所属で真如苑教学部の桑原一郎部長が発題。続いて 3 番目は、伝統仏教から、浄土真宗本願寺派総合研究所の富島信海研究員が「一回性の弔いから、連続性の弔いへ」と題して発表し、最後に教派神道から、大本教学研鑽所所属で大本本部祭務部の森良秀部長が「出口王仁三郎が解く霊魂観—葬送儀礼と追善供養は、家族・親族の極めて大切な営み—」と題して発表した。

各発表の後には質疑応答の時間が設けられ、講師とフロアの間で活発なやり取りが行われた。伝統宗教や新宗教を問わず、どの宗教においても、昨今の葬送儀礼の変化にとまどいつつ、どうすれば自らの教えに基づいて、人々の心に届く宗教儀礼のあり方を再構築していくことができるか、工夫をしている状況がうかがえた。

とくに私の印象に残ったのは、葬儀の席で「法話」を行うという浄土真宗本願寺派の富島氏の発表である。この「法話」があればこそ、参列した人々にも真宗の教えが伝えられ、それが葬儀の場面での布教伝道にもなる。要は、法話をどのタイミングで、どの人々に向けて、どのような形で説いたらよいかということであろう。法話方式の採用は、どの宗教にとっても参考になる葬送儀礼のヒントになるのではないかと思った。

日本生命倫理学会第 30 回年次大会に出席

金子 昭

12 月 8、9 日の両日、京都府立医科大学にて開かれた標記大会に出席した。大会テーマは「知の協創としての生命倫理学—学会 30 年の軌跡と今後の展望—」であり、このテーマに関連した学会企画シンポジウムが企画された。私は今回、「遺伝子操作と人間の尊厳」、「ゲノム合成技術の出現—合成生物学の進展とその ELSI」、「ヒト生殖細胞系ゲノム編集をめぐる倫理」の 3 つのシンポジウムを聴講し、多くの有益な知見を得ることができた。また、大会初日午後は、市民参加型バイオエシックスカフェに参加した。これは、生命倫理に関する幾つかのトピックを研究者と市民とが平座で自由に話し合うという、大会の独自企画である。途中出入り自由で 10 名前後が参加し、脳死・臓器移植と着床前診断とを題材に、3 時間かけてさまざまな意見交換を行った。初めての経験であったが、とても充実した内容であった。